

D.H.ロレンスの感性について

中山本文

はじめに

Aldous Huxley が、Lawrence の書簡集に寄せたその序文の中で、Vernon Lee が Lawrence について語ったことばとして紹介しているように、Lawrence は「どこに目を向けても人間が見るべき以上にものを見る人」(He sees, ..., more than a human being ought to see, ...) ¹⁾ だった。そしてそれは同時に Huxley 自身の Lawrence 評でもあった。彼はまた同じ序文の中でこうも述懐している、「...この男は程度ではなく種類の点で、何か異なった、卓越したものを持っている。」(... This man has something different and superior in kind, ...) ²⁾ と。こういった Lawrence 観は彼の諸作品の不思議な魅力の本質を見事に言い当てている。彼のそういう特質は前期の作品にも散見されるが、晩年の作品の方により顕著に表されている。その点で *The Plumed Serpent* や *Lady Chatterley's Lover*、それに *The Escaped Cock* は特に興味を引く。しかもこれらの作品に表出された彼特有の感性はそれぞれの作品の主題と深く関わっている。中期の重要な作品 *Women in Love* に次のようなエピソードがある。Water-Party という章である。その土地の炭鉱経営者の所有する領地の一角に Willey Water という湖があって、ここで毎年恒例の水上パーティが催された時のことである。主催者の後継者 Gerald Crich の妹が船から湖に落ち、彼は救助に飛び込む。彼はその時の水中の印象をこう語る。

... But it's curious how much room there seems, a whole universe there.... when you are down there, it is so cold, actually, and so endless, so different really from what it is on top, so endless... you wonder how it is so many are alive, ... ³⁾

ここで Gerald は思いもかけず現実の世界と隣接するように存在する、それとは全く異なる水中の広大な世界に直面し、すっかりたじろいでしまう。Gerald は偶然遭遇したその別世界から現実の世界に目を向けるという思いがけない経験をするが、この場合の Gerald のように、Lawrence はいつも現実とそれを超えた世界を行き来していたのではないと思われる。彼の描写がまるで別の世界から現実の人々を照射しているように感じられるのはそのためであろう。言うまでもなく、それは彼がいつもその両者の境界線のあたりで生きていたということの証左である。そういう異質性は Hermione という女性と作者の代弁者バーキンの「知性」対「本能」についての議論にあきらかである。そこで彼が彼女を非難するときの 'sensuous' (p.45) や 'sensual' (p.42) という言葉はロレンスの感性の特徴を十分に言い表している。

ここでは、Lawrence の感性の異質性が *Women in Love* と *The Escaped Cock* にどう表れているかをこの二つの言葉を手がかりに検証し、それが作品の主題とどう関わっているかを明らかにしたい。

1

Women in Love の Class-room という章に Birkin と Hermione が「知識」と「自然」について議論をしている場面がある。子供には色々な既成の知識を与えず、つまり無理矢理目覚めさせずに自然に目覚めるのを待つべきだと主張する Hermione に、Birkin はただ彼女が口先でことばを弄んでいるだけだと罵倒する。

Even your animalism, you want it in your head. You don't want to be an animal, you want to observe your own animal functions, to get a mental thrill out of them. It is all purely secondary ... and more decadent than the most hide-bound intellectualism. What is it but the worst and last form of intellectualism, this love of yours for passion and the animal instincts? Passion and the instincts ... *you want them hard enough, but through your head, in your consciousness.* It all takes place in your head, under that skull of yours. (p.41)(イタリックは筆者による)

更に Birkin は Hermione のそういう主知主義やアニマリズムへの虚偽の情熱は彼女が「真の肉体」(real body, p.42)を、「命の暗い官能的な肉体」(the dark sensual body of life, p.43)を持っていないからだと指摘する。頭によっては得られない「暗黒の知識」(the great dark knowledge, p.43)、というものが存在することを、すなわち自我とは無縁の知識が存在することを彼女に説く。しかもそれは Birkin の説明によれば、「他の存在の中に入ること」(the coming into being of another, p.37)によって得られる。二人の議論に自分の問題を照らし合わせて考えていた Ursula は、頭でないとしたらどうやって知識を得ることができるのかと反問する。すると即座に Birkin は答えて言う。「血ですよ。」(In the blood, p.43)と。以上の二人のやり取りには明らかに Lawrence の感性の際立った特質が表れている。「知性」と「自然」(本能)の相克は Lawrence の生涯のテーマであったが、彼の場合、単に「知性」対「自然」という図式で捉えることには無理がある。Lawrence にあっては、Birkin の口を通して厳しく糾弾される「知性」ですら、単純に理知的な頭で把握される「知性」ではない。Lawrence はその対立概念として本能の領域を表す「自然」をもちだす。二人のやり取りの中で、'spontaneous'(p.42)や'sensual'といった言葉で表されているのがそれである。Lawrence の言う「知性」とは、その意味では極めて本能的なもので、'sensual'な世界を理解し、そこに根ざして生きることのできる知性ということになる。Hermione の「知性」を徹底的に攻撃する理由はそこにある。つまり、官能に根ざしていないのだ。Hermione が言う、「魂の不具者、感覚の不具者」(crippled in their souls, crippled in their feelings, p.40)であることを彼女自身が余儀なくされるのは当然のことと言わざるを得ない。その結果、人々が「決して自分を忘れることがなく、いつも意識的で自分を意識して自分から離れることが出来ない」(never carried away, out of themselves, always conscious, always self-conscious, always aware of themselves, p.41)のは止むを得ない。Lawrence の考えるところでは、人々をこんなにも'unliving'(p.41)で、'self-conscious'にしてしまうのは、知性が過少であり、あまりにも'sensuous'であるからだ。この'sensuous'な知性が'our spontaneity'(p.41)や'our instincts'(p.41)を破壊してしまうのは、それがあまりにも人間の内奥の欲求に対して表面的すぎて、無感覚であるからだ。Birkin が子供の「感覚の不具者」の問題について、Hermione の主知主義を非難して、'Not because they (children) have too much mind, but too little'と言う理由はその点にある。「知性」が過少だと、'sensual'な自己は置き去りにされ、'sensuous'な自己が優位に立ち、人間の存在を狭隘なものに貶めてしまう。Birkin の考えるところでは、この'sensuous'な知性は意識的な意志を刺激し、人を必然的に自意識的にする傾向を持つ。一方、'sensual'な知性は無意識の意志を代弁する。言うまでもなく Hermione はそういう'sensuous'な世界の住人の代表である。'sensuous'な意識に支配されているという点では、この小説の登場人物の全てがそうである。その意味では主人公 Birkin も例外ではない。ただ彼の場合、今我々の置かれている立場を認識できるだけの知性は持ち合わせている。そこに救いがある。完全に'sensual'な世界から切り離されてはいない。自分の体内を流れる血を認識できる、いわば「血の認識」といった知性が彼にはある。故に彼の'There's the whole difference in the world,'... between the actual sensual being, and the vicious mental-deliberate profligacy our lot goes in for....' (p.44)といった認識も可能になる。'sensuous'な意識に支配されてしまうと、すなわち'sensuous'な世界に盲目的に浸りきってしまうと、「他の存在の中に入ること」は不可能になる。なぜなら、それは「自我にとっての死」(It is death to oneself. p.43)を意味するからである。いつも慎重で、自意識的であると'the dark involuntary being'(p.43)はその発露を

ふさがれ、やがて忘れ去られてしまう。結果は Hermione に見られるような、白い、知的な自我の専横である。「自己」という観念に取り憑かれるのも自然の成り行きである。Birkin の見る Hermione の問題もそこにある。現代に生きる我々はあまりにも自分に自惚れを持ちすぎていると彼は看ている。主知主義が行き過ぎ、全てを、特に本能的なものすらも頭を通して求めざるを得なくなったところに我々の悲劇はある。Lawrence が *Lady Chatterley's Lover* の書き出しで述べた 'Ours is essentially a tragic age.'⁴⁾ という言葉の「本質的な悲劇」は正にこの部分にある。我々は 'passion' や 'instincts' すらも愛するようになってしまった。正に我々の悲劇は本質的であると言わざるを得ない。

こうして見てくると、Birkin の意識を特徴づけているのは「電灯に照らされた」明るい世界の意識ではなく、そういう表層的な 'sensuous' な意識など全く無力にしてしまうほど強力な「暗黒」の官能の世界である。

このように、主人公 Birkin の知覚は極めて根元的で、本質的である。理知的な自我を持ちつつも生命の衝動や本能の疼きを感じることができる。まだ完全に「文明の醒めた光」に盲目になってはいない。自分の生命が宇宙の根元的な生命に根ざしていることを知っている。Breadalby という章で、再び Hermione は彼に手ひどくやりこめられる。ついに、Hermione は自分が存在し続けるためには Birkin という壁を破壊するしか他に方法がないという思いに至る。Birkin は彼女の部屋で文鎮を手にした彼女に背後から頭を殴りつけられる。何とか彼女の攻撃の手を逃れた Birkin は無意識のうちに森に入り込む。以下はその時の彼の様子である。

... he wanted something.... He wanted to touch them all, *to saturate himself with the touch of them all*. He took off his clothes, and sat down naked among the primroses, moving his feet softly among the primroses, his legs, his knees, his arms right up to the arm-pits, then lying down and letting them touch his belly, his breasts. It was such a fine, cool, subtle touch all over him, he seemed to saturate himself with their contact. this was good, this was very good, very satisfying. *Nothing else would do, nothing else would satisfy, except this coolness and subtlety of vegetatio travelling into one's blood.*

.....
There was this perfect cool loneliness , so lovely and fresh and unexplored. Really, what a mistake he had made, thinking he wanted people, he wanted a woman. He did not want a woman ---not in the least. The leaves and the primroses and the trees, they were really lovely and cool and desirable, they really came into the blood and were added on to him. *He was enriched now immeasurably, and so glad.* (p.107) (イタリックは筆者による)

Birkin は Hermione の傲慢な意志を押しつけられて、すっかり生命の泉が、その源のところでひからびたような気持ちを味わう。その自意識の衣とも言うべき衣服を脱ぎ⁵⁾、自らの裸体をむき出しの自然の生命に触れ合わせる。草木のひんやりとした心地よい感触に全身が「生气」にみなぎるような気持ちを味わう。彼はまた樺の木の息づかいを感じることが出来る。彼は樹木や草の葉や桜草が自分の血と交わり、自分に何かを付与してくれるように感じる。そしてひからびていた生命の源泉が豊かに満たされていくような充実感を覚える。そこはかつて彼がやってきたところであり、決して死を知らぬ、暗黒の世界であった。ここで明らかのように、Hermione の偽りのアニマリズムを無残にも打ち砕いた Birkin の官能主義は、日常の自我に彼の魂が疲労し、生命力の減退を招いたとき、日常の意識の衣を脱ぎ、自らの生命を闇の源泉に湯浴みさせることの出来る、鋭敏な、しかも柔軟な感受性からきている。それは「他の存在の中にはいること」が可能なる Birkin にして初めて可能になる世界である。彼は意識的な自分を放棄し、自らを無にし、「血」の意識そのものと化すことが出来た。それ故にこそ「官能的な肉体」(sensual body, p.42)を持つことが出来るのだ。彼のその「血の意識」は、いわば 'dark intellectualism' といったものである。

また、この「血の主知主義」といった彼特有の知性は *The Escaped Cock* においてもあちこちに窺うことが出来る。むしろ全体にみなぎっていると言ってもいいほどである。これはキリストの復活に取材した物語である。十字架より少々下ろされるのが早かったために、葬られていた場所で、けたたましい雄鳥の鳴き声に死の眠りから目を覚ます。まず、一度死んだ男が自分が追放された世界へ再び足を踏み出す時の描写を見てみることにする。たまたま出会った農夫に宿を提供してもらうことになった「死んだ男」は農夫の後をついて傷ついた足を引きずりながら木々の間に生えた緑の小麦を踏みしめながら農夫の家に向かって歩いていく。

He felt the cool silkiness of the young wheat under his feet that had been dead, and the roughishness of its separate life was apparent to him. At the edges of rocks he saw the silky, silvery-haired buds of the scarlet anemone bending downwards; and they too were in another world. In his own world he was alone, utterly alone. These things around him were *in a world that had never died.* ⁶⁾ (イタリックは筆者による)

この世に戻ってきたとはいえ、依然として死人同然の男の目には足の下に感じる小麦の若々しさも真紅のアネモネも「死んだことのない世界」に属しているように思える。死んで、その世界と距離をもって生きている人間故の感じ方である。傷だらけの男の体に慰めを与えてくれる太陽の光や植物の生命が「荒々しい」と感じられるのは彼が「この世にいるのでも、あの世にいるのでもなく、完全な眼あきでも盲人でもない」(Neither here nor there, neither seeing nor yet sightless. p.17) 中間に位置する人間だからに他ならない。

死んで陽炎のようにこの世をさまよう男の生命と彼の目に映る自然界の生命とがいかにかき離れているかが明白になっている。男は「死んだことのない世界」と極めて遠いところに位置している。そこから生命にあふれる自然界を見るために今の自分とは無縁の、永劫に絶えることのない生命の世界が異様に力強く感じられる。実は Birkin の言う「暗黒の知識」(the great dark knowledge, p37) もその源はこの「死んだことのない世界」にある。Birkin にとって「暗黒の世界」は計り知れない力の源泉であったことを思い出せば、この二つの世界の関係は明らかである。再び戻ってきた世界で彼の注意を引くのが「生命の力」であり、その激しさであるのは彼が、生命の炎が消え、生への欲望をすっかり失ってしまっているからに他ならない。以下の一節はそういう彼の様子を雄弁に物語っている。

As he came out, the young cock crowed. It was a diminished, pinched cry, but there was that in the voice of the bird stronger than chagrin. It was the necessity to live, and even to cry out the triumph of life. The man who had died stood and watched the cock who had escaped and been caught, ruffling himself up, rising forward on his toes, throwing up his head and parting his beak in another challenge from life to death. The brave sounds rang out, and though they were diminished by the cord round the bird's leg, they were not cut off. The man ... saw a vast resoluteness everywhere flinging itself up in stormy or subtle wave-crests, foam-tips emerging out of the blue invisible, a black and orange cock, or the green flame tongues out of the extremes of the fig-tree. They came forth, these things and creatures of spring, glowing with desire and with assertion. They came like crests of foam, out of blue flood of the invisible desire, out of the vast invisible sea of strength, and they came coloured and tangible, evanescent, yet deathless in their coming. (p. 21)

Birkinの言う'sensual'な肉体の属する世界はここでは「見えざる欲望の青い渦」であるとか「見えざる力の大海原」と形容されている。一度この世から葬られた男は表面的な現象にはほとんど関心を示さない。'sensuous'な現象の世界がそこから彼を追放したのだから。男がかつて属していた世界に「幻滅の激しい吐き気」を覚えるのは仕方がない。死によって意識的な自我の死を体験しているこの男の関心を引くのは、だから、いつもその現象の奥にあるものである。雄鳥が雌に飛びかかったとき、彼の目に映ったのは鶏そのものではない。彼が見たものは「うねりやまぬ生命の大洋に流れる潮の中で、生命の一端である波頭が、もう一つ別の波頭と一瞬の間交わり重なるところ」(one wave-tip of life overlapping for a minute another, in the tide of the swaying ocean of life, p.22)である。

またこの作品には、*Women in Love*でBirkinがHermioneの手を逃れて、自然の世界に身を委ね、自分の傷ついた魂を癒す場面と極めてよく似た場面がある。Birkinは自我意識の預かり知らぬむき出しの自然の植物によって傷ついた魂が癒されるのを覚えたが、ここでは「死んだ男」は更に広大な宇宙空間の一部となる。イシスの女との触れ合いを成就した男は身を隠している洞窟から半島を包み込むようにして広がっている空を見上げて思う。

How plastic it is, how full of curves and folds like an invisible rose of dark-petalled openness, that shows where dew touches its darkness! How full it is, and great beyond all gods. How it leans around me, and I am part of it, the great rose of space. I am like a grain of its perfume, and woman is a grain of its beauty. Now the world is one flower of many-petalled darknesses, and *I am in its perfume as in a touch.* (p.58) (イタリックは筆者による)

Birkinが自然の植物に宿る生命によって自己の枯渇した魂が癒されたように、ここでは「死んだ男」は「大なる精神」(the spirit of the greater life, p.51)を持った女やあらゆるものを触れ合わせる「見えざる神秘のバラ」との触れ合いに身を浸すことによって、かつての行き過ぎの過ちに導いた「小さな生に属する精神」(the spirit of the little life, p.51)が贖罪を得る。この小説には、Lawrenceの作品には珍しく狭隘な自我にとらわれない女性が登場する。彼女は*Women in Love*のHermioneとは全く異なり、また*The Plumed Serpent*の、あの、結局は「大なる自我」とも言うべき境地を理解するに至ったKateとも、更にまたMellorsによって'sensual'な世界を開示された*Lady Chatterley's Lover*のConnieとも異なる女性である。彼女はまだ少女の頃、CaesarやAntonyを知っていた。この二人は共に共通して自分の「男性」に対して花を開くことを求めるタイプの男たちであった。彼女はそういう二人から後込みした。彼女の「子宮の花」(the flower of the womb, p.39)はそういう貪欲な光には答えないで、冷たく花を閉じていた。「小さな生」に属する精神を受け入れることが出来ないからであった。その点で彼女の魂は「開かれた世界」の意識に目覚めていると言ってよい。「全ての女は、男に与えられるために生まれてきたのでしょうか？」(Are all women born to be given to men? p.39)という問いに対して老哲学者が答えたその言葉の中に彼女の存在の秘密が明らかにされている。

Rare women wait for the re-born man. For the lotus, as you know, will not answer to all the bright heat of the sun. But she curves her dark, hidden head in the depths, and stirs not. Till, in the night, one of those rare invisible suns that have been killed and shine no more, rises among the stars in unseen purple, and like the violet, sends its rare, purple rays out into the night. To these the lotus stirs as to a caress, and rises upwards through the flood, and lifts up her bent head, and opens with an expansion such as no other flower knows, and spreads her sharp rays of bliss, and offers her soft, gold depth such as no other flower possesses, to the penetration of the flooding, violet-dark sun that has died and risen and makes no show. (p.40)

この老人の言葉はイシスの女の本質に深く理解を示したものであることが明らかである。概して、

Lawrence のヒロイン達は自己主張が強く、小さな堅い自我の殻に閉じこもっているが、この女の場合は全く対称的である。男が死によって、すなわち、自我の死によって初めて到達した「大いなる生の領域」(the circle of the greater life, p.50) に目覚めている。「小さな意識」(small consciousness, p.43) をもった「小さな人々の小さな生」(the life of little people, p.44) には全く関心を示さない。彼女の目には母や母に仕える奴隷、そしてローマ人の奴隷管理人達はすべて「小さな一日」(the little day, p.44) の中で「小さな生」(the lesser life, p.43) に埋もれて生きているように写る。嫌悪すら覚えている。彼女が母や母に仕える奴隷達とは距離を置いて、探求の女神を守って暮らしているのはそのためである。そういう彼女だからこそ周囲の目にはただの薄気味の悪い浮浪者だとか罪人にしか見えない「死んだ男」に「深い生命の真の静寂」(the sheer stillness of the deeper life, p.43) を認めることが出来る。たのもし、男らしい Antony や Caesar の求愛に全く反応しなかった彼女は生まれて初めて大きく心を揺さぶられる。以下は洞窟で眠っている男の手足に傷跡を見つけて不審に思った奴隷がイシスの女を案内して男のねぐらにやってきたときの描写である。女は眠り込んでいる男の寝顔に目を注ぐ。

It was worn, hollow, and rather ugly. But, a true priestess, she saw *the other kind of beauty in it, the sheer stillness of the deeper life.* ... as if the tip of a fine flame of living had touched her. ... (p.43) (イタリックは筆者による)

また男がイシスの女に惹かれるのも彼女のそういう資質にある。死ぬ前、人々に自分達との触れ合いを強要された経験を持つ男は女に「傷を癒す優しい炎」(a tender flame of healing, p.46) を認める。それはいわば、老哲学者の言う「目に見えぬ太陽」の光のようなものである。照りつける昼間の太陽とは異なる神秘的な光である。激しく燃える太陽にはない「優しさ」(tenderness, p.46) がその炎にはある。男がローマ人の追手に不安を抱きながら、そこを立ち去ることが出来ないのはそのためである。「死んだ男」が再び甦る可能性を、言い換えれば「小さな意識」に基づく「小さな生」の死を体験した男が真の生命の内に再生する手がかりをこの「やさしい炎」をもつ女との「生命のやさしい触れ合い」(tender touch of life, p.46) に期待したのである。二人は共に「大いなる生命」の意識に目覚めている。こうして見てきて気付くのは、二人の五感を通して語られる言葉の質に見られる特徴である。Lawrence は *Women in Love* では表層の意識で生きる Hermione の世界を 'sensuous' という言葉で表現し、一方 Birkin の拠り所とする、Hermione が根ざす世界とは全く異質の世界を形容して 'sensual' と言った。これを *The Escaped Cock* の物語に照らし合わせて考えると、'sensual' な領域に属する言葉がいかに多用されているかがわかる。男が母や奴隷達の日々の活動を眺めて思うときの言葉もその良い一例である。そこでは 'the lesser life' や 'the little life' といった言葉が繰り返し使用されているが、これらは Hermione の 'sensuous' な世界にあたる。また男とイシスの女が根ざす 'the greater life' や 'the deeper life' は Birkin の 'sensual' な世界に符合する。更に 'small consciousness' は 'sensuous' で、'greater consciousness' は 'sensual' である。そしてまた Antony の the golden brief-day suns of show (p.40) や Caesar の 'the hard winter suns of power' (p.40) は 'sensuous' に属する。作者が、上述の作品に見られるように 'sensual' な世界に属する 'dark', 'deeper', 'invisible', 'involuntary', 'unconscious' といった言葉を繰り返しているという事実が彼の求める世界の性質を表しており、そしてこの世界こそが彼に癒しを与えてくれる、正に彼の生命の根ざす場所に他ならなかった。それはそのままこの作品で作者が意図したことを物語っていると言ってよい。

むすび

以上のように、彼のこういった極めて官能的な描写が可能になるのは彼が意識的にならざるを得ない世界に生きながらも、常に現実の視覚的な意識とは異質の、いわば非視覚的な意識の世界を旅することの出来る官能の人であったからであろう。彼の、いわゆる官能の言語といったものがそういう彼の特質を雄弁に物語っている。

また極めて象徴的なのは二人の主人公が名前を持たないという事実である。もちろん、二人はそれぞれ自分達の現実の世界ではそこで通用している名前をもっていたのであろうが、少なくともこの「二人の物語」においては名前を持っていない。それは明らかに作者 Lawrence の意図である。世俗の意識の象徴である名前は Birkin の言う 'sensuous' な世界に属する。すなわち、二人は名前を放棄したことによって世俗の意識を、すなわち表層の自我を葬り去ったのだ。そこに二人が真の、生きた、裸の意識の結びつきを達成できた理由がある。つまり、二人の男女が生命の化身として、真の存在として関係を成就したのである。つまり二人は名前の不必要な 'sensual' な領域で生きているのだ。Lawrence がこういう境地を描写できるのも、彼自身が何度も死の淵をさまよった経験を持っていたという事実と無縁ではあるまい。彼は、いわば「異界」に身を置き、そこから現実の生の実相を見ることの出来る人であった。その意味で、彼には現実の目と、更に死者の目が同時に備わっていたのだ。そのことが *The Escaped Cock* の創作と密接に関わっていることは間違いあるまい。甦った男の感性を通して語られる「生命のうごめき」を伝える言葉の妖しい魅力は正にそこに起因する。

Notes

- 1) Aldous Huxley, Introduction to *The Letters of D.H.Lawrence* (1932) contained in *The Collected Letters of D.H.Lawrence*, ed. Harry T. Moore (London: Heinemann, 1977) p.1265
- 2) Aldous Huxley, op. cit., p.1265
- 3) D.H.Lawrence, *Women in Love* (Harmondsworth: Penguin, 1995) p. 184
以下このテキストからの引用はすべてページ数のみを記すことにする。
- 4) D.H.Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, ed. Michael Squires (Cambridge: Cambridge Uni. Press, 1987) p.5
- 5) D.H.Lawrence, *The Plumed Serpent*, ed. L.D. Clark (Cambridge: Cambridge Uni: Press, 1987) p.
古代宗教の復活運動を推し進めている主人公ラモンの中間者的な性質を表すものの一つとして、衣服を脱ぐという行為がある。彼にとって、衣服とは世俗のことであり、世間的な自我を意味している。
- 6) D.H.Lawrence, *The Escaped Cock* (Los Angeles: Black Sparrow Press, 1973) p.18
以下このテキストからの引用はすべてページ数のみを記すことにする。

